

選評

作家 中村彰彦

予選通過作10編に、昨年の1

位作品のように完成度の高い作はふくまれていなかった。しかるにあえて海老澤薫氏の「灯火」を1位にしたのは、小説が始まる前に主人公を傷つける事件が起こっている、という設定とまとめ方に文才が感じられたからだ。

ただし、この作には稚拙さも目立った。不要な文章(9行目ほか)があること、疑問符や感嘆符の安易な使用が文章を安っぽくしていること、主人公では

る。

2位、石崎敬子氏の「トレジャー」は題名がよくない。日本語の作品は、題名も日本語でありたい。ハイキングに出掛けた初老の男女3人の会話は、素直に進んでいる。だが文章にも物語にも、もう少し花がほしかった。

これら2作よりも、一九五七氏「欠けゆくもの」の文章の方がよく練られていた。それが3位止まりとなったのは、不自然な落ちがつけられていたためだ。30年前に恋した少女が自殺

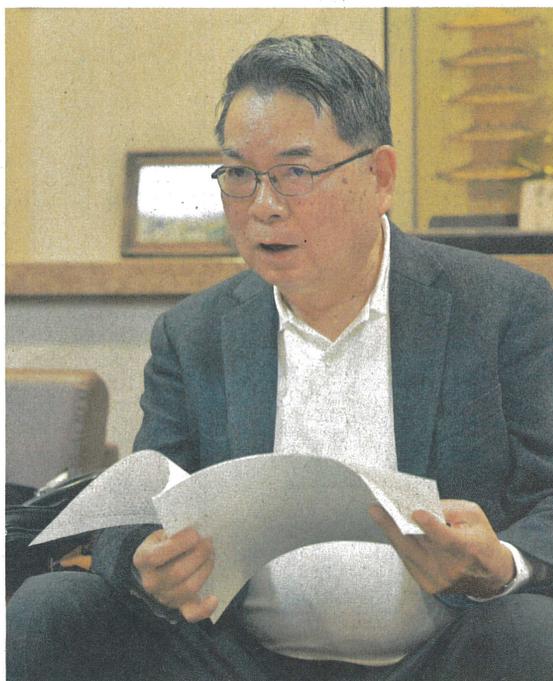
設定とまとめ方に文才

なくその兄の視点に立つ文章が混じることなど。そこでこの作は、一部の修正を入選条件とす

した、カラオケルームでその話をしていたら店主の奥さんが実は自殺していなかったその少女

だった、という設定は感心しない。

対照的に酒井美音さんの「夢



新春しもつけ文芸短編小説部門の最終選考に当たる中村彰彦さん＝下野新聞社

見る恋心」は落ちがよく決まっていること、猫が少女に変身するという着想を可愛らしい童話に仕立てて成功していることから奨励賞とした。13歳で10枚の作が書けるとは大したものだが、やはり2、3の表現の手直しを入選の条件としたい。

なかむら・あきひこ 栃木市出身。宇都宮高から東北大に進学。大学在学中に文学界新人賞佳作に入選。卒業後は文芸春秋に入社し、編集者として長く活躍した。1987年に「明治新選組」で第10回エンタテインメント小説大賞を受賞。91年から執筆活動に専念し、93年に「五左衛門坂の敵討」で第1回中山義秀文学賞、94年に「二つの山河」で第111回直木賞、2005年には「落花は枝に還らずとも」で第24回新田次郎文学賞。福島・会津をこよなく愛し、幕末維新の群像を描いた作品を数多く発表。東京都在住。